

子どもの本だな 54

このページは子どもたちにすすめたい本をとりあげています。本を選ぶときの参考にしてください。

だってだってのおばあさん

佐野 洋子 さく・え (フレーベル館)

小さな家に、男の子のねこと 98 歳のおばあさんが住んでいました。ねこは毎日おばあさんを魚釣りに誘いますが、いつも「だって私は 98 だもの」と断られます。

今日はおばあさんの 99 歳の誕生日。ねこはろうそくを買いに行きますが、帰りに川に落ちて 5 本になってしまいました。「5 本だってないよましさ」おばあさんとねこは 5 本のろうそくをケーキに立ててお祝いしました。「1 才 2 才 3 才 4 才 5 才。5 才のお誕生日おめでとう！」

次の朝、おばあさんは「だって私は 5 才だもの…あらそうね！私も行くわ！」とねこと一緒に出かけました。

鳥みたいに川を飛び越え、ねこみたいに魚を捕り、5 才になったおばあさんの元気な姿がいきいきと描かれ、おばあさんの嬉しい気持ちが伝わってきます。読んでもらえば 4 歳から楽しめます。(池之上)

秘密の花園

F・H・バーネット 作 猪熊 葉子 訳
堀内 誠一 画 (福音館書店)

インドで両親を亡くし、イギリスのおじの屋敷に引き取られたメリーは、気難しい顔つきのやせた女の子でした。

屋敷には、高い塀に囲まれた庭があり、十年間鍵をかけられたままになっていました。コマドリを追ううちに埋められていた鍵を見つけたメリーは、バラの木が絡み、草が生い茂る庭に、いくつもの芽が出ているを見つけます。庭を生き返らせようと、メリーは動物好きのディッコンの力を借りて庭の手入れを始めました。草を抜き、土を掘り返すうち、庭は緑に変わりました。二人は、病弱で部屋にこもりきりのコリンも庭につれだし、毎日作業を続けます。

ひそかに庭の手入れをしていくうちに、メリーもわがままなコリンも丈夫で明るくなっていきます。イギリスの荒野の花や空気、土の匂いに包まれ成長する子どもたちの姿がいきいきと描かれます。十歳くらいから楽しめます。(竹内)

4月	5月	4・5月の移動図書館 (いずれも木曜日です)				
12日	10日	塚森 地域内 10:30~10:50	沖代 地域内 11:00~11:20	福地(三反長) 地域内 14:30~14:50	米田 公会堂 15:00~15:20	竹広南 公民館 15:30~15:50
19日	17日			原池団地 公民館 15:00~15:20	山田 掲示板前 15:30~15:50	原 太田東地区農村 交流センター 16:00~16:30
26日	24日	広坂 公民館 10:30~10:50	上太田 公民館 11:00~11:20		太子 ニュータウン 公民館 15:30~15:50	吉福 公民館 16:00~16:30

お知らせ

青空リサイクル

図書館で不用になった本や雑誌を無料で提供します。持ち帰り用の袋をご持参ください。

4月28日(土)

10時30分~15時

場所：図書館南側テラス

リサイクル用の本は、随時補充します。

雨天の場合は4月29日に延期

『地下鉄道』 コルソン・ホワイトヘッド 著 谷崎 由依 訳

早川書房 395頁 2017年12月刊 2,300円 (請求記号)Fホ

一八〇〇年代初頭、黒人奴隷の労働力による大規模プランテーションが行われていたアメリカ合衆国南部の小説。黒人奴隷の少女コーラは、南部の州ジョージアで母と一緒に暮らしていた。しかし母のメイベルは十歳のコーラを残し逃亡してしまふ。コーラの農園主は穏やかな人物で、奴隷たちはパーティで浮かれ騒ぐことも許されていた。農園主が死ぬと隣の農園主がやってきて過酷な労働と残酷なやり方で服従を強いる。コーラは逃亡を決意し、地下鉄道を使い北部を目指す。

その頃、奴隷制度を廃止すべきと考えた白人たちにより黒人奴隷を北部に逃がすことが秘かに行われていた。コーラたちは「駅長」たちに導かれ、地下深く掘られた線路上を鉄道車両に乗り暗闇の中を疾走していく。行き先は誰にも知らされなかった。逃亡を助けたことが発覚すれば白人でさえ命を奪われるのだ。その後を奴隷狩り人リッジウェイが追う。州境を越えサウスカロライナに着いたコーラたちは、修道院の助けで働き口を見つけ生活は落ち着いてきたと思えたが、断種手術を勧められ疑いを感じ始める。そこへリッジウェイが現れ、コーラは間一髪で再び地下鉄道に飛び乗った。

南北戦争前のアメリカが舞台。地下鉄道と呼ばれる組織は実在したが、地下に鉄道が走っていたわけではなく、この部分は著者の創作。しかしこの創作が逃亡の緊迫感をより現実的に感じさせる。同時代が舞台の『ハックルベリー・フィンの冒険』には奴隷のジムの逃亡を助けるかどうかハックが悩む場面が描かれているが、その悩みの深さを垣間見た思いがする。奴隷制の根底には、立場の弱い者への嫌悪と、そうした者たちを攻撃してもかまわないという暗黙の了解が潜んでいると思うが、奴隷制が廃止された今もこの嫌悪や暗黙の了解は存在しているのではないか。難題をあらためて考えさせる物語だ。

(西村)

4月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

5月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

- * カレンダーの×印は休館日。
- * は館内整理日。返却のみ受けつけます。(10:00~17:00)
- * 開館時間は10時~18時。金曜日は20時まで開館。

地下水

3月14日の神戸新聞(夕刊)、金益見氏の書かれた、初めて社会に出る人に向けての文章の中に、心に響く言葉があった。

「学生でなくなるということはどういうことか。それは、もう側ではなく、あげる側になるということです。今まで自分がもらってきたものを、下の世代にギフトできる人を、私は大人と呼んでいます。」

これまで親から、先生から、先輩からもらってきたたくさんのもの、それを当人に返すのではなく、次の世代に手渡すことが恩返しになるのだと納得した。

図書館に並ぶ本の中には、人類が何千年も昔から積み重ねてきた知識や知恵が詰まっている。人から人へと受け継がれてきた財産である。それを次世代に手渡していくという図書館の大きな仕事を、諸先輩からもらった多くのものとともに、次の世代につなげていきたいと思う。

(池田)

